

スイスのレマン湖をモデルとしたリゾート開発を

橋本榮一 VS 仲里嘉彦

—— 橋本相談役には、昭和48年のオイルショック直後に、三井物産会長として来沖されましたときに、那覇東急ホテルにおいてインタビューに応じて頂きましてから、20年が経過しようとしておりますが、その当時のことが私の印象に鮮明に残っております。それは復帰直後という沖縄の経済が混沌としている時期でありまして、沖縄の将来の方向がまだ定まっていない状況にありました。橋本相談役はそのときに、沖縄のすばらしい海などの自然空間を生かした観光振興を図って行くべきだという提言をされました。その中で、スイスのレマン湖みたいに自然景観を生かしたリゾート開発を推進すべきであるというお話を頂きましたのもつい最近のように思われてなりません。

しかし、橋本相談役が20年近くも前におっしゃったことが、現在においても大きな課題となっておりますことを想起致しますと、先行の見通しにつきましては、的確な判断をされたものと警嘆している次第であります。

そこで本日は、当時を回想して頂きながら、ここに改めて沖縄についての思い出や、今後の沖縄に対する方向について橋本相談役のお話をお伺いして、沖縄の将来の指針になればと思っておりますので、当時沖縄を訪問されたねらいやその目的等から順次話題を展開して頂きたいと思います。

橋本相談役 沖縄県が、27年間の異民族支配体制から開放されまして、昭和47年5月15日に、祖国復帰が実現したわけでありまして、復帰そのものはこれまでの閉鎖経済から開放経済体制へ移行することになりますので、私としては、沖縄への新しいビジネスチャンスがないものかということで沖縄に行ったわけです。

それから沖縄県においては、復帰記念事業の一環として、「海その望ましい未来」をテーマとした沖縄国際海洋博覧会が、昭和50年から開催されることになっておりまして、私ども三井グループが提唱した本部半島において開催されることがすでに決定、三井グループとしても三井館を出展することが決まっておりましたので、それらの現地視察等の目的もあったわけです。

私が沖縄に降り立った第一の印象は、何とすばらしい景色の海だろうと思ったわけです。私は、それまで年に何回も海外旅行をやっておりまして、その頃すでに世界60ヶ国ぐらい視察をしておりまして、その中でもスイスのレマン湖に匹敵するぐらいのすばらしい景色だという感じを持ったわけです。

本土にも景色の大変すばらしいところがいたるところにあります。沖縄のように、海の景色のすばらしいところは本土にはまずないと思ったわけです。

沖縄の海の景色があまりにもすばらしく、とくに今帰仁村の運天港のある羽地内海は、大変すばらしいところでありましたので、そこに土地を買い求めて、家をつくろうと思いましたが、交渉をしたんですが、ハブがいるということで、それをやめたんですよ。私はへビが大嫌

いで、坪5,000円という安い地価でありましたが、ヘビがいるということで断ったんです。

それから2つ目は、中南部を視察して感じましたことは、水資源が乏しいという感じを受けました。水がないところには工業などの産業の立地は困難であると思ったわけです。

従って、沖縄の経済振興を図るためには、観光産業を振興することがよいのではないかと感じを持ったわけです。とくに、中南部地区においては、CTSなどの石油貯蔵基地がかなり立地しておりましたので、あの施設は観光振興を図っていく上で大変災いだったわけですね。

—— そうですね。CTS基地は沖縄経済発展に、それほど貢献していないと思いますね。

橋本相談役 復帰直後ですから、沖縄経済はまだ基地経済に大きく依存しているという感じでありました。

—— おっしゃる通り、戦後の沖縄経済は基地依存経済でありましたし、復帰直後は、現在と違いまして大きく基地に依存した経済体質であったといえます。

橋本相談役 基地経済体制下にあるという気風が、私が沖縄に行った頃までは残っておりまして、沖縄の純朴な人の気持が半分、基地に頼る気持が半分という感じで、好悪両方を持っているという感じを受けましたね……。

いただきものの経済といいますか、進駐軍に頼ってくらしているという気持が抜けないと産業の自立というのは難しいわけです。そのような諸々の理由から、私は沖縄の目先をよくするためには、観光立県を考えなければいけないのではないかと考えたわけです。そのときの印象につきましては、現在も鮮明に憶えております。

それから海岸一帯に、防潮、防風林として植栽されていますアダンという植物は、異国情緒があって大変よいですね。そのアダンを工夫して植栽すればもっとよくなるという思いを致しました。

その頃の沖縄は、ホテルの施設がそれほど建設されておりませんで、せいぜい那覇東急ホテルぐらいでした。それから沖縄のレストラン等もまわりまして、食事をしたり致しましたが、食事とかメニューは、まだ観光客に満足して頂ける内容のものではないという感じを受けました。

現在では、沖縄の食事は健康食として本土においては大変人気が出てきておりますが、素材は沖縄にいっぱいあるわけですから、それを工夫してメニューとして出せば、本土からの観光客もさらに増えるのではないかと感じを受けました。

—— 橋本相談役からは、20年近くも前のお話をされておられるわけですが、アダンに致しましても、食事に致しましても、いろいろと工夫すればもっと沖縄が全国からクローズアップされると思いますし、また、20年前に橋本相談役が感じられましたことが、現在においても課題になっていることを考えますと、一度だけの沖縄訪問でよく沖縄の特性をみておられるなあ……という感じをしているわけです。

とくに、最近においては海岸線はコンクリートブロック等で護岸をつくりまして、陸域と海域がこの護岸で遮断されまして、水辺空間を楽しむウォーターフロント的なものが失わ

れつつありますし、陸域と海域の一体感を蘇生させることが求められております。このアダンの植栽というご提言は大変貴重であると私も考えております。

橋本相談役が新鮮な感覚で、沖縄を実際にごらんになられ、そこで生活している人間よりも的確にその現実をみておられるということになると思います。

橋本相談役 私にもその経験があります。私は東南アジア育ちでして、欧米に勤務したことはないんですよ。三井にしては珍しいケースですけども、重役になりましたときアメリカを知らなければいけないということで、当時の社長の水上さんがアメリカに行っただけでいいということになったんですよ。

私が日本賢人会に、当時の三井銀行社長の佐藤喜一郎さんのお供をしてアメリカに行ったことがあるんです。その当時は、私も若く52、3歳の頃ですが、2週間ぐらいアメリカに滞在したことがありまして、そのときのアメリカの印象が極めて強烈だったんです。生まれてはじめてアメリカをみたわけですからね……。

東南アジアには10年以上もおりましたので、詳しいわけですが、アメリカははじめてでしたが、それだけに視察したアメリカの都市は現在でも鮮明に記憶しております。それに比べニューヨークに長年滞在して、マネジメントをやっておりますと、状況の判断が分からなくなってしまうということもあるわけです。

長期間、同じ地域にビジネスをやっておりますとポリシーが出てこなくなるということもあります。従って、はじめての印象の強さが、仲里さんのおっしゃるように大事なことだと思います。

私は、沖縄の自然を損なうことがなく、もっと沖縄県民の所得を向上させるような産業の展開が出来ないものかと考えているんですよ。

私は、現在台湾の仕事をやっているんです。昨年12月と今年7月に香港に行ってきたんですが、どちらかといいますと、台湾はビジネスに走りすぎて、日本以上にドライという感じがしますね。道を歩いてもデコボコ道で、しかも汚いし、建物も汚いですが、国はお金持なんですよ。

—— 飛行機もあれだけ大量の軍用機をアメリカから、輸入するぐらいですから大変なお金持ですよ。外貨保有高でも1,000億ドル近くあり世界一ですからね。

橋本相談役 私は、沖縄県に対して香港みたいになれということは申しませんが、台湾のようなリッチで沖縄のような自然の残っているよさがうまく溶けあうとよいがなあ……という感じですね。

—— 台湾のお話が出ましたので、ついでに申し上げますと、実は台湾から直接成田や羽田に空輸するよりも、沖縄経由で東京などに運んだ方がコストが安い食糧品がかなりあるようでして、それをかなり詳しく調査したデータをつい最近みせて頂いたことがあります。その辺についてもビジネスチャンスは東南アジアに近い距離に位置しているという地理的条件を生かすことも、これからの沖縄の経済振興の上で知恵をしぼってその対策を考えるべきだと思っております。

橋本相談役 貿易をやっている人間の常識からいいますと、いまおっしゃったように、荷物を積み替えますとコストがかかるんですよ。台湾から物を運んで積みかえて、なお沖縄にメリットがなければいけないわけです。関税で安くつくとか、または日本に輸出しても価格面でも安くなければいけないわけです。海外から沖縄を経由して日本に輸出することによって商品が安くなる国、県なりの政策がなければいけないと思っております。

沖縄には現在フリートレードゾーンが設定されておりますが、今後の沖縄経済の振興策として、沖縄を加工貿易基地としてどう政策的に位置づけていくかということが大切でしょうね。そのような政策は、県民に犠牲を強いるということではありませんから、私はそのようなことをどう国、県が政策的に考えているかがポイントであると思っております。

われわれは、商売人ですからソロバンが成り立たなければいけないわけですが、台湾から食糧をもってきて、中継基地にするという考えに、私はよくソロバンが頭の中で立ちませんけれどもね…。

現在台湾は、日本に取りましては食糧基地ですが、私が承知している知識では、台湾には食糧増産能力はないとみていいと思います。これからの台湾は、むしろ工業基地へと移行していくこととなりますので、台湾で生産される工業製品をどういう形で日本に輸入するかということを考えないといけないと思います。

現在、日本と台湾では日本が大出超でして、むしろ台湾は日本にどんどん輸出して、日台間の貿易バランスを保ちたいというのが、台湾側の強い要望でありますから、それをどう沖縄を基地として中継貿易を展開していくかを検討する必要があるのではないのでしょうか。台湾の産業は殆どが日本からの中間原料で成り立っているわけですから、日本から台湾への輸出が盛んになればなるほど、台湾の工業は盛んになっているわけですが、その辺が台湾の国民感情と経済の実態は乖離しているわけですよ。そのことを解決しなければいけないという面があるわけですが、台湾に食糧だけを依存していると、どうも先細りになるという心配があるわけです。これらについては具体的に検討しなければいけない課題であると思っております。

—— それから私は、昭和30年代後半から昭和45年まで、東京で新聞記者をやっております、通産省などの役所や経済界の取材をやっておりました関係で、大手商社などをまわったものです。そのときに、新聞記者間で組織の三菱、人の三井とよく言われておりました。実際に取材活動を通じてもよくそのことを実感したわけですが、その辺について率直なところどうなんでしょうか…。

橋本相談役 たしかにその通りですね。昔から組織の三菱、人の三井といわれてきましたが、現在は必ずしもそうではありません。三井というところは、統制がとれていないんですよ。非常にインシピーブルなんですよ。

私はよく新聞記者の諸君に言うんですよ。三井物産の人間に聞いてごらんください。同じことを10人に質問すると8人は違う答えをすするでしょう。三菱は同じことを質問すると8人が同じ答えをして、残り2人は違うことを言うでしょう。三井と三菱ではそれだけ違いがあ

るわけです。

それは、どちらが悪いということではなくて、三菱カラーというのは非常に強いわけですから、うちのカラーの締めつけがないんですよ。自由なところが三井の1つの社風でもあります。私の意見を言いますと現在はそのカラーが悪く出てきています。

人間は弱者ですから、自由になったときは、権力者にスイトトーキングにやると偉くなる傾向があるわけです。1人の権力者が出ますと、その権力者にスイトトーキングをやりますと、その人が引き上げられることになるわけです。個性があつて、上司に強い発言をする人は敬遠されて、逆に権力者に迎合した発言をする人が抜擢される傾向がありますね。それは組織上悪い形で出てきているように思います。

私は昭和5年に三井に入社致しましたので、62年間、この会社にいるわけですが、昔の三井は力があつたけれども自由にいろいろな仕事をやらせて貰いましたよ。私など若いときは、大スペグレーションをやりました。

昭和6年に、金輸出再禁止を日本政府は実施したんですよ。一度は井上蔵相時代に金輸出解禁に踏み切ったわけです。

—— その頃の日本経済は疲弊して、大変な状況にあつたと思いますが……。

橋本相談役 そのころ日本経済が疲弊して金の輸出解禁に踏み切ったわけですが、その結果、円が暴落したわけです。私が22歳の時で入社して2年目ですが、現在でもよく憶えております。

昭和6年の12月に、金の輸出が解禁したときに、友人とうどんを食べに外出し、家に帰ろうとする午後11時ちょっと前だったんですが、号外が出て騒いでいるんですよ。私はピンとききましたね。これは金輸出再禁止だと直感したんですよ。その号外を買って、家に帰って読んでからすぐ会社にかけてついたので、当時、門司にある支店勤務でしたが、冬でしたのでコートをかけて会社に行ったわけです。

今日のオファーしたのは、金輸出再禁止で円が暴落しておりますから、全部引き受けるの大儲けするからと主任にいったんですよ。そうすると主任は、そうか、それなら間違いはないと思うけれども万一ということもあるから、オファーのきている半分ぐらいにしておこうということで、私が半分は引き受けたんですが、そのとき会社は随分儲かったんですよ。

当時、三井のドル買い事件というのがありましてね、三井の池田さんが、日銀の井上さんが売りに出たときに、ドルはどんどん高くなって、円はだんだん安くなるんだからということで、三井はフリーにドルを買ったんです。その三井のドル買い事件は、後世有名になりましたが、そのときに池田さんがドルを買い込んだお蔭で、金の再輸出禁止で大儲けをしたことがあるんですよ。

そのときに、池田さんに呼ばれてまして、君ここに10万ドルの為替があるから、研究して世界で儲かる商品を買えといわれたんですよ。現在の10万ドルはたいした金額ではありませんが、昭和6年頃の10万ドルは大金でしたからね。私なんかはドル買いは知りませんでした

ので、私は商品を買って儲かる方法を考えたわけです。

その頃は、養鶏事業がようやく出てきた頃で、昭和5年頃が、日本における養鶏の勃興期です。その養鶏の飼料として、トウモロコシを大量に満州から輸入したんですよ。ところが、満州のトウモロコシは乾燥が不十分で品質も悪かったことから、もっと良いトウモロコシを輸入しようということで研究しておりましたので、その研究の結果、アルゼンチンに良質のトウモロコシが輸入できるということが分かったものですから、10万ドルを全部その輸入代金に当てたわけですよ。

—— 22歳という若い年齢でそのような大きな仕事もやらされたんですか、今ではちょっと考えられませんが……。

橋本相談役 あの頃はやらせましたよ。アルゼンチンからのトウモロコシの輸入で、大分儲かったんです。為替相場が2倍にはね上がっていましたから、2倍の利益をあげることが出来たわけですよ。

今は、そういう力もありません、現在は、そのような気風でもありません。当時は人も育てたんです。

われわれは入社当時から責任ある仕事を任されましたが、まかりまちがえば首です。上司からこの仕事を勉強しろといわれると、損をしないように必死になって勉強もし、研究もしますから、それが自分を磨くことにもつながるわけですよ。

そうすることによって、その人に力もついてきますし、視野も広がりますが、最近の22歳前後の若い社員には、ちょっと無理ですね。上司の顔色を伺いながら仕事をしているようでは、人間的な成長はありませんよ。

それと戦前は、極端なまで競争主義で力量主義でしたが、戦後は平等主義に変っているんです。昔は一人の秀才を育てるのに、10人の落伍者をつくれという教育でしたが、現在は、1人の成功者よりも10人の平均的な人材を育成するというふうに変ってきているんですね。その社員教育の方法はまちがっているんですね。そのことは日本の経済社会全体的な傾向だと思います。

最近におけるバブル経済の崩壊などによって、日本経済も悪くなっておりますが、私は、日本経済は完熟の域に達したと思うんですよ。

これまでの日本経済は、成長過程にあったといえると思いますが、それがちょっと行きすぎという感じであります。対症療法で1本釣り投資減税をやるとか、1つの方法で問題は解決できたんです。今や国民も高い意識を持つようになりましたし、時短の問題も解決してきておりますので、総合的に経済政策を打ち出していくという方向に発想を切り替えていかないと、日本経済はよくなると思うわけです。

大蔵省などは税金の話をしてしまうと、税金を上げるという感じしかありませんよ。例えば、消費税に対して国民が非常にアレルギー体質になっているから、つぎの参議院で負けるからということで、その議論をやめております。消費税をあげて直接税を下げて、直間比率を改善しなければいけないという意見が出てきておりますが、そのことはその通りだと思います。

ているわけです。

ただ、今大蔵省に消費税の話をする、大蔵省は税金を上げるということになって下げるという話にはならないわけです。そのような税制の問題になりますと、国民はアレルギーになってしまうわけです。

成熟した経済社会の日本において、どのような税体系がよいかについて抜本的に検討することが必要であるというのが私の考えなんです。これまで、日本経済が発展してきたように、今後共、高度の経済成長が続くという発想で、税制を手直しだけでやろうとすることは、間違いだというのが私の考えなんです。

—— 私は、橋本相談役がおっしゃるように深く考えていなかったんですが、只今のお話を伺い致しまして、これからの日本経済は大変なことになるという危機感を持っているんですよ。

日本も世界でも長寿国家となり、21世紀初頭には、4人に1人が高齢者となり、高齢化社会を迎える時代といわれております。そうなりますと労働人口も出生率が減少していく傾向が今後さらに進む状況において、いろいろな問題が出てくるようになると思うわけです。

今後共、機械化がさらに促進されることになると思いますが、それにしても出生率が低下していきまると、生産に従事する人口の割合が総体的に低くなり、それに向けた政府の行政施策が求められてくると思いますね

橋本相談役 私もそう思いますね。うちの全体だけをみてもこれから大変だと思います。私なんかは安い月給でよく働きましたよ。

三井物産は明治9年の創業ですから、今年で116年になりますが、三井物産がゼロのスタートから戦前のわが社の発展の基礎を築いたのは、われわれを安い給料で搾取したお蔭だといっているんですよ。それが三井物産の発展の基礎になっているんです。現在の社員は楽ですよ。これは自分の会社を悪くいうのではなくて、日本全体がだいたいそういう状態にあるわけです。

給料も高くなりましたし、中流意識が殆どを占めるようになっているわけですが、それでも会社が儲って日本経済がさらに発展していくという考えは間違っていると思うんです。日本は資源もありませんし、日本国民全体が働かないと国は富まないわけですから、その辺についてもっとよく考えないといけないと思いますね。

—— ただ今橋本相談役は、われわれを安月給でこき使ってきた結果、今日の会社を築いたと揶揄めいた表現をされましたが、本当のところ使命感旺盛でやりがいのある仕事があったから、頂点に登りつめることが出来たんじゃないかという気がするわけです。

実は、私なんかは新聞記者になりたては、とても使ってもらえるような能力がなかったんです。そのことについては、自分も認めていることでありますが、編集部長からも君は営業にまわった方がよいといわれた時期がありました。つまり広告取りをしろということですが、記者として入社したプライドが許さず、何とか新聞記者として頑張りたいとお願いして記者として残してもらったんです。

大変厳しい上司でしたが、その先輩のお蔭で一人前の記者として私を育ててくれたことに大変感謝しているんですよ。仮に私が営業マンとして配職されていたら、すぐ会社をやめることになったでありますし、そうっておれば一生その人をうらんでいたかも知れませんが。

自分の能力や努力を棚にあげて人を非難することは簡単ですが、そのことが人をキズつけ、自分も自暴自棄になって暗い人生を歩んでいたかと思うと、ぞっとすることがあるんです。真実は1つなんです。自分の努力によって先輩や他人をすばらしい人間としてあがめることが出来ますし、そのような努力は大変ですし、またその体験は、私の人生において大変貴重であったという感じがするんです。

橋本相談役 最近の新聞記者は本当にサラリーマン化しております。この前も金丸さんが例の5億円事件のことで記者会見があったんですが、ろくな質問も出来ませんでしたね。

それは商社も新聞記者も一般の会社員も全般的にサラリーマン化しております。ロシアとの交渉にあたって、もう少しは個性的な独創的な発想があつてよいと思うんですよ。

もう一度二宮金次郎になれとはいいませんが、現在は大変な世の中ですよ。もう少しは引きしめないといけないという感じがします。それから戦後日本はアメリカに大変お世話になりましたが、今の日本の政策はアメリカのいいなりという感じを与えるので、それもあまりよくないですね。独立心がないような気がするんです。例えば、われわれが陳情しても、政府はなかなか聞いてくれないことでもそれがひとまわりして、アメリカ側からいわせると結構通ることがあるんですよ。

私は1回しか沖縄に行っておりません。沖縄に関心を持ってお話を申し上げるのは、太平洋戦争においては、われわれも体験をしてきましたが、沖縄には大変迷惑をかけたわけですので、何とかして沖縄の経済振興を図ってやる責任があると思っているからなんです。

そこで政府としても沖縄振興のために、もっと何かをやるべきだと思いますし、またわれわれ経済界としても、何が沖縄振興に役立つかについて考えているんですよ。

—— 実は、沖縄県が復帰致しまして今年でちょうど20周年という記念すべき年を迎えたわけでありまして。これから21世紀を視野に入れた第3次沖縄振興開発計画が今年度を初年度に向こう10年間を計画期間としてスタートしたわけでありまして、同計画は、復帰時に制定されました沖縄振興開発特別措置という法律で、沖縄の社会資本の整備が国および国民の特段のご配慮で、復帰前に比べますとみちがえるように充実強化されております。

このように、沖縄振興開発計画期間内に自立的発展の基礎条件を整備して、経済的自立が図られるものと思っているところです。その第3次沖縄振興開発計画の中においては、国際的なリゾート基地の形成がうたわれておりますし、また沖縄県は東南アジアの南の玄関口として、国際交流の拠点形成を図る方向が示されておりますので、今後は、海外との交流を活発化していくなかで、沖縄の将来を切り開いていくべきだと思っております。その面でも橋本相談役にも沖縄へのご支援をお願い申し上げる次第であります。

橋本相談役 いや、いや私なんかはそんな力はありませんけれども、台湾も同じようなこ

とを考えているんですよ。これから出ていく先は南シナと東南アジアだと思っているんです。

ですから、台湾からはさかんに日本の企業を誘っているんです。東シナに行きますと、日本の資本がはいった方が、台湾人だけでやっているよりは危険性が低くなるんですよ。ところが、日本人は東南アジアや東シナのことについてあまり知らないわけです。

私は、戦前台湾に10年ぐらい滞在しておりました関係で、東南アジアの情勢については、ある程度くわしいわけですが、当時東南アジア各地で台湾人や沖縄人が大変活躍しておりましたし、そのような関係を生かした事業の展開は必要だと思っております。

台湾からは、日本企業に対し東シナや東南アジアにジョイントベンチャーで企業進出しましょうという誘いはかなりきているわけです。沖縄は、私的資本が余りありませんので、このような大きな話が出るかどうか分かりませんが、何せ沖縄は南の国ですから、東南アジアに目を向けるという視点は大切なことだと思いますね。

—— 私からすると沖縄の経済人の発想をもっと広い視点からながめ、行動するという方向を目指していくべきだと思っているんですよ。東南アジアにビジネスチャンスを求めると同時に、15世紀から17世紀頃、東南アジアとの交易で黄金時代を築いてきた先人の遺産をわれわれが担っていかなければという思いを強くしているところでありまして、やがてはわが国においても所得水準が最も高い地位を占めるのも決して夢物語ではないと思っております。要はしっかりした行政と県民のたゆまぬ努力がその前提にありますけれども……。そのためにも橋本相談役には知恵を是非ともお借したいですね。

橋本相談役 私なんかはもう83歳で年ですし、知恵もありません。言葉はちょっと悪いかもしれませんが、沖縄は資源が豊富にあるということではありませんし、資金があるわけではありませんので……人のフンドシで相撲を取ることを考えてもよいと思うわけです。

観光は人のフンドシで相撲を取っているようなものですし、また中継加工貿易についても同じことがいえると思うわけです。東南アジア等の南方への企業進出についても同じことがいえると思います。

—— 同じようなことが、私が親しくおつきあいをしております鹿児島経済大学の高橋先生も沖縄は将来、東南アジアの経済的ゲリラ基地として位置づける必要があると指摘したことがあります。橋本相談役がおっしゃったこととだいたい同じことをいっているんですよ。

橋本相談役 私は、戦前10年間も南方で生活してきましたので、華僑と日本人の違いを目の当りにしてみても感ずるんですが、本土人はだめですが、沖縄人は華僑的な経済的ネットワークが出来ればよいと思いますけれども……

—— いやそれはなれません。本土の方々よりも沖縄の人間は、おっとりしておりますしビジネスの面でもシビアさに欠けており、例えば、不渡りを出して倒産しても殆どが営々と営業をしているとか、経営者のモラルにも問題がありますので、とてもじゃありませんが、

華僑みたいな組織をつくって商売するということは沖縄人は最も不適當なんです。

橋本相談役 なれないでしょうね。中国本土から東南アジアに綿布のボロを纏って綿布のたたき売りをして、一代で大財閥になるぐらい根性がありますからすごいものですよ。沖縄人がそれが出来れば富めることになると思いますけどね……

—— それは無理ですね。私は、アサハン・アルミニウムの瀬尾啓次郎社長の招待を頂きまして、インドネシアを訪問したことがあるんですが、そのときにはアラムシャ宗教大臣との単独インタビュー等のチャンスを稲嶺一郎先生のはからいで実現しましたが、一週間のインドネシア滞在中に感じましたことは、周囲の経済を動かしているのは華僑で、政治などの表舞台には出ませんが、経済のみならず政治の面にも大きな影響力をもっているということにびっくりしたんです。しかし、残念ながら沖縄人氣質からして、華僑的商売はまず出来ませんね。

どうも予定の時間もかなり超過しておりますので、最後に、スイスのレマン湖に比肩するほど、すばらしい自然景観をお褒め頂き、また、沖縄観光の将来展望についてのご提言をお願い致したいと思います。

橋本相談役 先程も触れましたように、私はこれまで60数ヶ国をまわってきましたが、の中で最も景色がきれいだったのは、スイスのレマン湖です。それに匹敵するのが、沖縄のエメラルドグリーンの海の自然だと思ったんですよ。

レマン湖は山もきれいだし、その山に沿って建てられたホテル等も実に自然と調和しておりますし、湖も美しいし、背後の住宅も実に整然とした家並みが形成されております。

しかし、沖縄は海はきれいですが、建物などが自然と調和したつくりになっていないのは残念ですね。

沖縄が21世紀に向けて、観光振興を戦略産業として位置づけているということであれば、あのすばらしいエメラルドグリーンの海とマッチしたリゾートホテル等を整備するとともに、家並みについても都市計画なりによって整然と整備して、世界のオアシスとして樂園の島として開発していくことが必要だと思えます。そして観光だけに依存するというだけではなしに、東南アジアの中継加工基地として、将来の発展の方向を具体的に展開することが、沖縄に富をもたらすものと期待しているところであります。

—— 本日は時間を延長して頂きまして、沖縄に対していろいろアドバイスを頂きましてありがとうございます。

どうか今後もご健康には十分留意され、沖縄への知恵をさずけて頂きますことを併せてお願いを申し上げ、インタビューを終わらせて頂きます。